

ヒューマンウェアインターンシップ報告書

3 / 4

インターンシップ体験記 (海外インターンシップの場合は英語で記入)
<p>このインターンシップは、自身の担当教員から京都大学小村研究室との共同研究に参加してみないかと持ち掛けられたのがきっかけでした。この研究のテーマは、自身が専門研究の中で常に繰り返し続けてきた「脳波」という現象に重要な知見を与えるものであり、実験手法は専門研究と全く異なるものの、是非やってみたいと思い、プロジェクトに参加することにしました。その後、インターンシップを開始する半年ほど前に受け入れ先の担当教員と顔合わせをし、その場で、自身の今までの専門研究について発表を行いました。同時期に、インターンシップ期間中に具体的に何をやるのか、そして、インターンシップ開始までに準備しておくことなどを協議しました。自身に与えられた課題は、実験で使用する脳波計測用のアプリケーションの作成であり、数か月ほどかけてコツコツと作成しました。この頃は国際学会や論文の作成が大詰めに差し掛かっていた頃であり、なかなかまとまった時間が取れず、完成に至るまでに苦労しました。さらに完成したアプリを用い、本番を想定して計測を行ってみたり、予期せぬノイズが発生してしまい、その除去がインターンシップ期間中の課題の一つになりました。並行して、この共同研究と関連する文献調査も行い、数か月に一回の頻度で受け入れ先の研究室のメンバーと輪談会を開催しました。専門研究とは異なり、共同研究として与えられた抽象的なテーマを、いかに実験のレベルに落とし込んでいくか文献調査を通じて自分で考える必要があり、準備期間中の一連の輪談会を通して、研究プロジェクトを自分で形にしていける良い訓練を積むことができたと思います。このインターンシップの目的は、脳波の発生メカニズムを理解するために、外部から侵襲的に刺激を与えた時の脳活動を調べるというものでした。自身の専門研究はヒトを対象としていたため、サルへの扱いに関しては完全に素人で、業務内容がまったく異なる研究室での生活には当初、不安を覚える場面もありました。実際に、受け入れ先の研究室に配属されると、まずサルの世話やサルを用いた実験方法を覚えるところから始まり、これらのタスクは一日の大半を占めており、またすべてが未知の体験で、新鮮さを覚えることが多かったですが、配属された最初の週間ほどは、サルの扱いなど慣れないことに戸惑うことも多かったですが、受け入れ先の研究室メンバーの方たちが、わからないことについて親切かつ丁寧にレクチャーしてくださったため、インターンシップが始まってから 2、3 週間ほどで、一通りの業務をこなせるようになっていました。当初は、いきなりやってきた人間である自身に対してサル側から威嚇されることも多く、サルのケージの出し入れなどにも苦戦していましたが、意識してサルを観察していくうちに、サル一頭一頭の個性にも気付けるようになり、そこから一気にこの実験の魅力を感じるようになっていったと思います。また、研究室メンバーの方からは頻りに飲み会などに誘っていただき、そこでのやり取りを通じて、受け入れ先の研究室に素早くなじむことができて良かったと思っています。受け入れ先の指導教員の方は、自身が所属していた天野研と同様に、学生との日頃のコミュニケーションを重視する方で、研究に関することだけではなく、世間話のレベルで様々なことを話す機会がありました。他愛ない雑談を通してお互いの人となりを知ることができ、それが信頼関係につながっていったと思います。また、何気ない会話が研究課題解決のヒントにつながることもあり、生活のすべてを研究に活かす、研究者としてあるべき姿勢を垣間見た気がします。受け入れ先の指導教員の方は、研究の進め方や中・長期的な方針の立て方が非常に的確で、参考になる面が多かったと思います。研究室全体を俯瞰して一人一人のタスク量や進捗状況をムラなく把握し、何か問題が生じると即座にその解決策を提示してらっしゃいました。研究室のメンバー一人一人に、負担が大きすぎず少なすぎない絶妙な配分でタスクを課しており、また、例えばサルの手術のように全員に大きな負担がかかるイベントがあった直後には、積極的に打ち上げを開いてメンバーを労うなど、プロジェクトマネージャーとしてのアムとムチの使い分けにおいて、非常に参考になりました。こういったチツプスの多くは、具体的には融合研究の代表としてメンバーをまとめていく際に、行動の二本として活かしていくことができるのではないかと考えています。先に述べた通り、元いた研究室と受け入れ先の研究室では、業務内容が根本的に異なっていたため、一日の時間の使い方もガラリと変わってきました。受け入れ先では午前中にサルの給餌や実験を行うことが多く、朝 6 時起きがデフォルトとなり、しばしば睡眠不足を感じるがありました。さらに、それらのタスクは気力と体力を大きく消耗するため、慣れない初めのうちは、気を抜くと、眠気などで午後からのデスクワークに支障をきたし、何もできないまま一日が過ぎてしまうこともありました。しかし、数か月も経つとこの生活リズムに慣れはじめ、午前と午後で全く異なる業務内容であっても、すぐに頭を切り替えて対処できるようになりました。</p>

ヒューマンウェアインターンシップ報告書

4 / 4

インターンシップ体験記 (続き)
<p>また、受け入れ先の研究室では今まであまり馴染みのなかったチームワークを必要とする業務に遭遇する場面が多くありました。例えば、サルを別の部屋に運搬し実験を行う際は、2、3 人で役割分担をして作業する場面があり、自身の役割だけではなく、他のメンバーの役割も把握する必要があります。この時、一人一人に得意としている専門性があり、その人にしか任せられない仕事が存在することが印象的でした。今まで所属していた研究室での生活では、一日のほとんどを解析作業などの一人で作業に費やしてきたため、やはり最初のうちは慣れずに大変でした。しかし、この点についても、インターンシップ期間が進むにつれて、すこしずつ連携のとれた行動を意識できるようになっていき、最終的には阿吽の呼吸で作業ができるまでに至りました。インターンシップ全体を通して、複数人で作業する際のコツのようなものを習得できたのではないかと思います。受け入れ先の研究室では週 2 回、論文の輪談会が行われており、積極的に論文紹介が行われていました。特に、論文を紹介する際、ポスドクや博士課程の学生と、修士以下の学生がペアを組み、年長者側が後輩をサポートする方式がとられており、ここでも元いた研究室との文化の違いが感じられ、大変興味深かったです。インターンシップ期間中に自身が体験した中で最大のカルチャーショックは、衛生面に対する価値観の違いでした。動物を相手にする受け入れ先の研究室では、飼育室、飼育前室、さらにその外側の部屋など、段階的に衛生レベルの異なる部屋が設けられており、それぞれの部屋に応じた衛生管理が厳密に行われていました。例えば、飼育室でサルを触ってしまった場合、飼育室よりも外側の部屋の機材を直接触ることができず、また、上履きなども部屋ごとに履き替える必要がありました。サルの餌に関しても、栄養バランスに常に気を配って給餌していました。特に顕著だったのはサルの手術を行う際で、サルを直接取り扱う「手術者」と外回りを担当する「助手」は、触れていい物が徹底的に区別されていて、それが印象的でした。医療に根ざった価値観が培われていない関係上、どうしても細かいミスをしてしまうことがありましたが、衛生管理を怠り感染症などになると、サルの命に直結するので、意識的に緊張感をもって手術に臨んでいました。インターンシップ期間中の進捗具合という意味においては、インターンシップの終了間際に実験のセットアップをほとんど完了し、実験のテストデータを計測することには成功しましたが、肝心の本番実験を行う段階には至ることができませんでした。元々サルの実験は、セットアップに 1 年以上、全体としては数年以上をかけて行う場合が多く、半年の研究期間では完遂することが難しいと事前に知らされておりました。しかし、優先度に応じてタスクを取捨選択できていれば、もう少し効率的に研究を進められたのではないかと感じ、そこが心残りと感じています。この点は、自身が今後関わるプロジェクトにおいても、常に課題として意識していきたいです。また、全体的に、論文の精読以外に英語と触れる機会が少なく、英語能力を向上する機会を意識して持てなかったのは残念に感じています。受け入れ先の研究室では複数のサルを飼育しているため、週末も当番制で給餌を行う必要がありました。家から片道 2 時間かけて直接通っていたため、当番の日は一日大学で過ごすことが多かった。最初は十分な休息がとれないのではないかと不安に感じていましたが、一度割り切ってしまうと、さほど気にならなくなりました。普段の大学生活においては、食事の面でかなり優遇されていると感じました。京都大学の周辺には学生街が広がっており、学生をターゲットとした食堂を多く見かけました。とにかく量が多く、かつリーズナブルなメニューが多かったため、昼食、夕食に関しては不満を感じることはなかったです。自宅から直接通っていたため下宿先の環境を知る機会はほとんどありませんでしたが、京都大学の吉田寮をはじめとした学生寮では、年に数回イベントが催されており、非常に和気あいあいとした雰囲気を感じる事ができました。治安面では、京都なのもあって全く不安に感じることはありませんでしたが、物価は大阪に比べてやや高いと感じました。京都大学はどこに自由な校風で、学生たちは基本的に真面目ながらもチャレンジ精神に満ち溢れており、こちらからも良い刺激をたくさんもらえたと思います。インターンシップ全体を通じて重要だと感じた点は、新しい環境で新しい人間関係に、いかに素早く適応していけるかということでした。チーム単位でプロジェクトを進めていくためにはチームワークを養う必要があり、そのためには信頼関係の構築、ひいては日頃の何気ないコミュニケーションが重要になってくると思います。このインターンシップを通じて、新しい環境であっても物怖じせず他人に意見が言えるようになり、チーム全体を俯瞰して自分が次に何をすべきか、そのプランを考えられるようになったと実感しています。この成長は、自身が今後、博士人材として何らかのプロジェクトに携わる際に、活かされていくのではないかと考えています。</p>